

片づけ

加藤文子

かつて両親が暮らした住まいを整えて、週末だけのギャラリーを開設してから三年が経つ。

四月から十一月のあいだ、おだやかな気候の頃にひらいている。

今年から、額装した植物スケッチや陶の作品などを保管していた二階も展示スペースとして開放してみようということになった。

準備をすすめるにあたり、一階の戸棚を整理して二階の荷物を移動させることにした。表向きは片づいているふうではあるが、戸棚の中はいろいろな物がとりとめなく納めたままになっている。

通路脇の戸棚を開けたら、奥の方から昔の額縁がたくさん出てきた。とっておいたことは覚えていても、どこにどんな額縁をしまい込んでいたのか忘れてしまっていた。

あらためて取り出してみると、そのまま放っておくのは惜しいような、気持ちをそえられる



ものがいくつもある。

正方形の小さな木製フレーム、これは四十年ほど前、実家の盆栽園の展示室で父の仕事風景を描いてくださったデザイナーのFさんのイラスト展を催したとき用意したもの。中身のイラストはFさんが所蔵。十二カ月の様子を描いてもらった記憶から、十二枚揃っていたはずが紛失して八枚になっていた。

これら小さなフレームをペイントして、そこからイメージした絵を描いて合体させてみてはどうかしら……と思った。

描かれた絵に額を合わせるといのが常であると思うのだが、逆のことをしてみたいと思った。母が外国の絵ハガキを入れて飾っていた写真たてなどにも……。

選り出したものに早速アシスタントのYさんがサンドペーパーをかけて表面をなめらかにしてくれたり、絵の具が馴染むように白で薄く下塗りをしてくれたので、ますますやる気がわいてきた。

二階の片づけを決行したことで、戸棚の中を改める機会を与えられたばかりでなく、忘れていた額縁を発見することもできた。これからペイントする楽しみもある。

畳と板の間、両サイドに大小二枚のスタンドグラスが詰め込まれた吹き抜けの二階に、今春から人をお通しする。ギャラリーとして新たな役割を担うことになる。

陽の傾きとともに光がスタンドグラスをくぐり抜けて室内が虹色に染まる瞬間や、裏庭で大きく成長したコナラの枝先が窓辺でささやくように揺れる様子も、向こう隣の竹林の景色も、楽しんでいただけだろう。

夫がペンキで微かに白を施した仕切りの低い梁に、Iさんの羽衣のような染織の作品をふわっと掛けてみたい。

二階の空間が息をしている。



2階のスタンドグラスから陶のオブジェをのぞむ
撮影：加藤文子